



ボランティア・市民活動を広げ、応援する！▶

ネットワーク

特集

市民とつくる美術館・博物館

- **アートを紹介して描く私たちの未来**
稲庭彩和子 国立アートリサーチセンター
- **自由に楽しむ「市民主導」の美術館** 世田谷美術館
- **おもちゃで誰もが笑顔に** 東京おもちゃ美術館
- **いきた形で暮らしを伝えたい** 昭和の暮らし博物館





このコーナーでは、
毎回一つの団体取材し、
活動内容やそこで活動
するボランティアさんの
生の声をお届けします。

災害ボランティアセンターでの ボランティアを体験しました!!

ネットワーク 編集部

今年は何東大震災から100年。首都直下型地震も懸念されており、毎年のように全国各地で水害も起きていて、災害ボランティアがますます注目されています。

残暑厳しい8月の最終日曜日。都立木場公園において、江東区主催の総合防災訓練が実施されました。その一環として実施されたのが、江東区災害ボランティアセンターの設置・運営訓練です。主催は社会福祉法人江東区社会福祉協議会。当日は社会福祉協議会（以下、社協）の職員他に災害ボランティアの経験のある人や全く初めての人、合わせて48名が参加しました。その中には区内に在住または在勤のIT企業の皆さんもいます。

災害ボランティアセンターでのボランティア？

災害ボランティアセンター（以下、災害V.C）は災害時に発生する被災者の困りごと（ニーズ）に対して、各地から集まってくるボランティアたちをつなぎ、その活動を支援します。多くは被災地の社協が自治体と協力して設置・運営しています。

まず、災害V.Cの運営ボランティアを体験しました。運営ボランティアには以下のような活動があります。

- ① ニーズ担当…被災者の困りごとを聞いたり、調べて「ボランティア依頼票」を作成します。
- ② 受付担当…各地から集まってくるボランティアの人たちの受付をし、説明書を渡します。
- ③ マッチング担当…掲示板に「ボランティア依頼票」を貼

り出し、活動を説明。希望するボランティアをチームにし、リーダーを決めます。

- ④ 送り出し担当…被災地の地理に詳しいボランティアが、活動先への行き方を説明します。

⑤ 運転ボランティア…災害V.Cから離れた場所にはボランティアが運転する車が巡回し、ボランティアや機材を活動先に運びます。

⑥ 資材担当…活動に必要な資材をボランティア・チームに貸し出し、管理します。

今回、参加者は上記の①（ニーズ担当）と⑤（運転ボランティア）以外の担当に分かれて運営側のボランティアを体験するとともに、被災者支援に駆けつけるボランティアの両方を体験しました。災害時には社協職員も被災していたり、長期間活動できるボランティアも少ないことから、

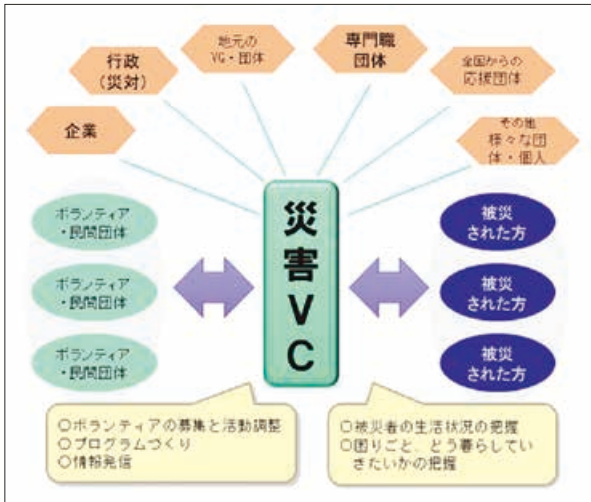


図1 災害ボランティアセンター



【4】ガレキの撤去作業を体験。



【5】江東区内在住・在勤のNECグループの皆さん。参加賞は避難食でした。



地域のボランティア・市民活動相談窓口

<https://www.tvac.or.jp/area/>



【1】江東区社会福祉協議会より災害ボランティアセンターの設置宣言！



【2】災害ボランティアセンターには各地からボランティアが集まります。



【3】被災者からの協力依頼に対して、ボランティアのグループを作ります。

災害V.Cの運営には多くの人たちがいろいろな形で参加し、チームワークが必要となります。

被災者のためのボランティア活動！

さて、訓練の後半は、被災者からガレキ撤去作業の依頼があったと想定し、会場中央に用意してあるガレキを撤去してきました。ガレキをリヤカーで運ぶと、暑さで汗が吹き出てきました。

今回は実施しませんでした。被災者のための活動は、ガレキの撤去以外にも、泥出しや家の中の片づけ、引っ越しの手伝い、救援物資の仕分け・配布、被災者の交流の場や子どもの遊び場のサポート、買い物や通院の支援など、多種多様です。災害V.Cではこうした困りごとが「ボランティア依頼票」となって掲示板に貼られるので、ボランティアは自分のできそうなことを選んで参加します。

身近な社会福祉協議会に行ってみよう！

今回参加してくれたIT企業の皆さんに感想を聞いてみました。「災害V.Cも災害ボランティアも何をするのか全くわからなかったのですが、とても勉強になりました。災害前からこうした訓練に地元の人たちや企業も参加し、どのような協力ができるかを考えておくとよいですね。動画配信などすれば、初めての人でもイメージがつかやすいのでは」また、聴覚障害のある人やインド出身の人は、「誰にもわかりやすい視覚情報があるとよいかもしれません。インターネットを使えば、リモートで災害ボランティアセンターをサポートすることも可能です」という提案もありました。

全国各地の社協では何らかの形で災害に備えた取り組みを行っていますし、平常時のボランティア活動も紹介しています。ぜひ、一度、身近な社協をたずねてみてください。

深める

特集

ボランティア・市民活動に役立つ視点や情報をお届けします。

市民とつくる美術館・博物館

- 5 子どもと大人が自由にアートを楽しんでいる「市民主導」の美術館
◇公益財団法人せたがや文化財団 世田谷美術館
- 7 おもちゃで誰もが笑顔に ～市民がつなげる輪～
◇東京おもちゃ美術館
- 9 いきた形で暮らしを伝えたい ～実家をまるごと博物館に～
◇NPO 法人 昭和の暮らし博物館
- 11 目黒区美術館 遊びや憩いの場をつくるボランティア
高麗博物館 市民発、日本とコリア交流の歴史博物館
水戸芸術館現代美術センター 開館当初から市民が活躍するアートセンター
たいけん美じゅつ場 VIVA 取手駅に直結！アートな居場所
- 14 概説
市民とつくる美術館・博物館 ～アートを介して描く私たちの未来～
◇稲庭 彩和子 独立行政法人国立美術館 国立アトリサーチセンター

知る

ボランティア・市民活動のさまざまな形や
ボランティアに一步ふみだすヒントをご紹介します。

- 1 思い立ったがボラ日
災害ボランティアセンターでのボランティアを体験しました!!
- 17 TVAC News 東京ボランティア・市民活動センターの事業から
居場所の活動の今を知るアンケート調査 2023 報告
- 19 特別寄稿
NPOが創り出すエピソード空間 III :
東日本大震災被災地を支援するNPOとそのスタッフへのインタビュー調査から
◇須田 木綿子 東洋大学社会学部
- 21 せかいを見る⑥
複雑都市・エルサレムの日常
◇木村 万里子 日本国際ボランティアセンター
- 23 つぶやきブレイク vol.29 「かっこいい」について考える
- 25 いいもの みい〜つけた! Vol.45
仲間の想いをのせて焼く いもの子せんべい
◇社会福祉法人 皆の郷 第2川越いもの子作業所

ボランティア保険および行事保険の加入は、東京都内の各区市町村のボランティアセンターまたは東京都社会福祉協議会窓口で手続きができます。

東京都社会福祉協議会指定保険代理店
有限会社 東京福祉企画
TEL : 03-3268-0910 FAX : 03-3268-8832
http://www.tokyo-fk.com/

表紙のことば

熱い日差しにうんざりして、降りすぎる雨に恐怖し、人としての身体の弱さ。緑や実りやいのちや感情や、世界の理の中で振り回されながら生き続ける私達は強い。

—フローラル信子



特集

市民とつくる 美術館・博物館

市民が主体的に運営にかかわる美術館・博物館(ミュージアム)は全国にあると聞きます。
なぜ、どんなふうに市民がかかわっているのだろう？
そして、市民が参画することで、もたらされるものとは？

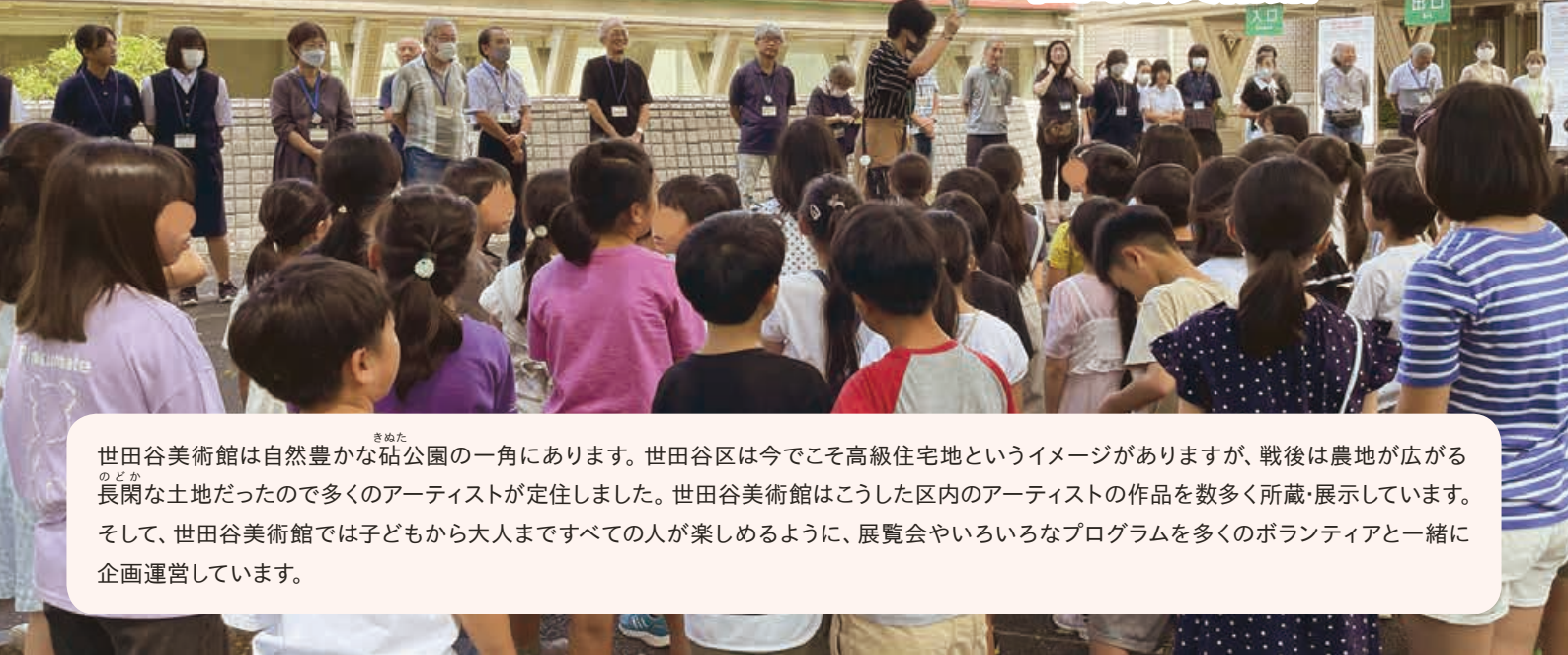
今号では、美術館・博物館を訪れ、活動の様子を拝見しながら市民や学芸員にインタビューしました。

そして、概説では、アートを通して人と人がつながることの意義や、市民がかかわることによりさらに広がるミュージアムの可能性について、稲庭彩和子さんにお話をうかがいました。

欲しい未来をみんなでデザインするときに、身近にある美術館・博物館がその一翼を担う場となる！…なんだかウキウキしませんか？

子どもと大人が 自由にアートを楽しんでいる 「市民主導」の美術館

公益財団法人せたがや文化財団 世田谷美術館



世田谷美術館は自然豊かな砧公園の一角にあります。世田谷区は今でこそ高級住宅地というイメージがありますが、戦後は農地が広がる^{のどか}長閑な土地だったので多くのアーティストが定住しました。世田谷美術館はこうした区内のアーティストの作品を数多く所蔵・展示しています。そして、世田谷美術館では子どもから大人まですべての人が楽しめるように、展覧会やいろいろなプログラムを多くのボランティアと一緒に企画運営しています。

美術館は多様な人が集まる 「コミュニティの拠点」

バブル期の1986年に世田谷美術館は設立されました。当時の世田谷区長が公約として、一部の美術マニアではなく、全ての市民のために区立の美術館を作ることを宣言し、市民たちが美術館を学べる講座『美術大学』もスタートしました。また、区立の全小学校の4年生と全中学の1年生が世田谷美術館を訪問する『鑑賞教室』があり、毎年8千名を超える子どもたちが来訪しています。

この『美術大学』は毎年5月〜12月に週2回開催され、約60名の人たちが受講しています。卒業生の中から「これからも美術館に関わりたい。何かできることはない？」という声が生まれてきました。ちょうど同じ時期に、『鑑賞教室』に参加した子どもたちのケアが必要だという状況があり、『美術大学』の卒業生が中心となって、ボランティアとして子どもたちをサポートすることになったのです。その後、いろいろな活動がボランティアのアイデアで生まれ、全国に先駆けて取り組まれています。ここでは2つの活動を紹介します。

ボランティアが子どもたちの アート鑑賞をサポート

「おはようございま〜す！」元氣な声が美術館に響きます。9月の朝、世田谷区立O小学校4年生の93名が集まってきました。「未来に残したい大切な作品のために、さわがない、走らない、触らない」という3つの約束をした後、5〜6名のグループに分かれ、ボランティアが1名ずつ付いて、『鑑賞教室』が始まります。コースは自由。展覧会だけでなく、美術館全体を見学します。

作品の前で、「何だろうね?」「どんな感じがする?」…、ボランティアが子どもたちに優しく話しかけます。ボランティアの役割は、作品の解説をするのではなく、子どもたちと一緒に作品を楽しみながら、子どもたちが感じることに耳を傾けること。12年以上活動しているという男性は、「子どもたちの発想が面白いね。美術館が好きになってくれるといいなあ」と、目を細めます。

普及担当マネージャーで学芸員、ボランティア・コーディネーターの東谷千恵子^{あずまや}さんは、「子どもたちは多様な作品やボランティアと出会いながら『正解のない世界』を体験してほしい。そして、真実は自分で見



(右)『鑑賞教室』を訪れた子どもたち、それを迎える20人からのボランティアのみなさん。
 (左上) ボランティアと一緒にアートを楽しむ『鑑賞教室』。
 (左中) 緑豊かな公園の中にある世田谷美術館。
 (左下) ボランティアが企画運営する『100円ワークショップ』の様子と、『100円ワークショップ』の魅力聞かせてくださったボランティアの山下恵美子さん(左)・井口有紀さん。この部屋が人であふれかえる日もあるという。
 (QRコード: 100円ワークショップの活動記録誌2)



学芸員でボランティア・コーディネーターの東谷千恵子さん

つけてほしい」と話します。

**ボランティアと一緒に
企画運営する
『100円ワークショップ』**

「世田谷美術館の子どもたちのワークショップは事前申し込みが必要で、その日に来てくれた子どもたちが何かしたいと思ってもらえないよね」というボランティアのつぶやきから、『100円ワークショップ』が2004年にスタートしました。毎週土曜日の午後(夏休みは金曜日)開催され、すべての来館者に気軽に創作に関わってもらい、自分の中から新しいものが生まれる喜びや、その気持ちをつまみ食いしている人たちと分かち合う喜びを感じてもらっています。

ワークショップの企画・運営は美術館とボランティアで相談しながら行っています。作るものは、開催中の企画展とリンクし、1000円の参加費で小さな子どもから大人まで楽しめるもの。今回は、**柚木沙弥郎**の型染を参考に、自由に型紙を作り、コットンバックにステンシルで彩色します。受付やあちらこちらでボランティアが気さくに声をかけてくれました。

ベテランのボランティアの女性たちに長続きの理由を聞いてみると、「小さな子どもから大人まで、いろいろな人たちが来てくれて楽しいからかなあ」「この美術館ではボランティアはできるとき、したいときに活動すればよいし、いろいろなことを自由に企画・実施できるのがいいですね」とのこと。

「市民主導」の美術館をめざして

現在、ボランティアの登録者は450名。年間約300日に延べ3千人のボランティアが活動しています。ボランティア活動をするのに特別な資格や参加条件はありません。東谷さんは「ボランティアは普段から世田谷美術館を利用している方々で、美術館という場所をもっと楽しくするための『道しるべ』といった存在です」と言います。

ボランティアの気づきやアイデアが形になっていく世田谷美術館には多様な人たちが集まり、自由にアートを楽しんでいました。



(上) 美術館HP
 (下) 美術館ボランティア紹介ページ

おもちゃで誰もが笑顔に

～市民がつなげる輪～



インタビュー

東京おもちゃ美術館

(運営：認定NPO法人 芸術と遊び創造協会)

都会の中で出会う おもちゃの世界

皆さんは子どもの頃、どんな「おもちゃ」で遊びましたか？大人になつてから、「おもちゃ」で遊ぶ機会はありませんか？東京メトロ丸の内線・四谷三丁目駅を出て、車行き交う甲州街道から一本入った住宅街の一角にある「東京おもちゃ美術館」

ここは旧四谷第四小学校の校舎の中にあり、この校舎は昭和10年に建てられた歴史的建築遺産で、15年前に中野から移転し開館しました。赤ちゃんから子どもだけでなく、大人も一緒に楽しめる場所が東京おもちゃ美術館です。

今回、東京おもちゃ美術館チーフディレクターの田向優さんに、館内を案内いただきながらお話を伺いました。

「一口館長」の力で 子どもの声を地域に残す

東京おもちゃ美術館のある建物は、元々取り壊しが決まっていた旧小学校です。けれど地域の住民の「小学校を残してほしい」「子どもたちの声を絶やさないでほしい」という要望があがりました。東京おもちゃ美

術館はその当時、中野にある「芸術教育研究所」の付属施設として開設されていて、おもちゃのコレクションも増えて施設も手狭になっていたところでした。そんな時に、東京おもちゃ美術館を旧四谷第四小学校の校舎に移設しないかと地域住民から声がかかります。地域住民は、小学校を残すことができるし、東京おもちゃ美術館もより広いスペースでおもちゃの展示や親子の広場を開設できます。

しかし問題になったのは、費用。校舎の賃料や改装費に多額の資金が必要です。銀行に融資をお願いしても中々取り合ってもらえなかったそうです。ここで館長の多田千尋さんが名案を見出します。それが、「一口館長制度」です。東京おもちゃ美術館の理念に想いを寄せてくれる人から募金を集め、一定額以上の寄付を寄せた人の名前を積み木に掘って永久に展示するという取組みです。積み木というおもちゃで、寄付者の想いと東京おもちゃ美術館の想いをつなぎます。この取組みで3000万円ほどの寄付金を全国から集めました。全国に東京おもちゃ美術館の応援団がいることを知った銀行も融資をしてくれるようになったそうです。

「おもちゃ学芸員」の声

Q.「おもちゃ学芸員」の活動の楽しい!嬉しい!を教えてください。

- ・子どもだけではなく大人も夢中で遊んでいる様子を見れたとき!
- ・おもちゃを通じて親子のコミュニケーションのきっかけが作れたとき
- ・おもちゃ好きな学芸員の仲間との出会い。

Q.「おもちゃ学芸員」の活動を始めたきっかけは?

- ・親子や家族でお客さんとして訪れたことがあり、とても楽しく過ごせたから!
- ・おもちゃの研究や実践をしていた経験、資格を活かしたい!
- ・おもちゃの魅力を知ってもらおうサポートがしたい!

Q.「東京おもちゃ美術館」のおすすめスポットは?

- ・“おもちゃ工房”! 身近な材料での工作や糸鋸で赤ちゃんの手形足形を作ったり!
- ・“おもちゃの森”! 木の砂場があったり「木のおもちゃっていいな」って感じられる場所!
- ・“赤の部屋”! 昔ながらのおもちゃが揃っていて親子で遊び方を教えあうことも!



おもちゃ学芸員イベントのメニュー。
(右ページ) 勢ぞろいしたおもちゃ学芸員やスタッフのみなさん。

東京おもちゃ美術館で運営を担うほとんどが「おもちゃ学芸員」と呼ばれるボランティアです。おもちゃ学芸員の方にもインタビュアー・アンケートを実施しました。いただいたコメントは、上記で紹介しています。東京おもちゃ美術館にとって、お

おもちゃ学芸員が「コミュニケーションの架け橋に」

地域の住民の声、全国からの応援の声、そしておもちゃを愛する東京おもちゃ美術館のスタッフの想いが集まり、四谷に東京おもちゃ美術館が移転し2008年にオープンしました。

おもちゃ学芸員の存在は、人と人をつなぐ架け橋です。触れるからこそ分かるおもちゃの楽しさや難しさを伝える架け橋に、おもちゃを通じた家族のコミュニケーションの架け橋に。おもちゃ学芸員はなくてはならない存在です。

おもちゃ学芸員の特技を生かしながら活動する方もたくさんいます。東京おもちゃ美術館にあるおもちゃや展示を活かす遊びの紹介や、身近な物品を使った工作を教えたり。好きなことで自分自身も笑顔になりながら、小さな子どもから大人まで笑顔にすることが得意なおもちゃ学芸員の皆さんが、東京おもちゃ美術館でたくさん待っています。

おもちゃ学芸員のフォロワー体制がばっちりなことも、たくさんのおもちゃ学芸員が活躍できる要因です。活動は希望シフト制で、活動の開始前後にはしっかりと時間を取ってミーティングを実施します。開始前は、当日のイベントの紹介や注意事項の確認などの情報共有が中心です。活動終了後は、その日の活動であった楽しかったことやモヤモヤしたこととの共有です。取材当日もこの活動後のミーティングに同席させていただきましたが、おもちゃ学芸員の皆さんの「今日も楽しく活動出来た」

という晴れやかな顔でお話をされていたのが印象的でした。おもちゃ学芸員同士の交流も豊かで、お互いの得意なことを教えあったり、遊びやゲームで対戦してみたり。おもちゃ学芸員自身が仲間と楽しみながら活動していることが、東京おもちゃ美術館に来館するお客さんの笑顔につながっていることが分かります。

「これからもどこでも笑顔が咲く場所に」

いま、おもちゃ美術館は全国各地に広がっています。北は岩手県花巻市から南は沖縄県国頭村まで。全国にある12か所のおもちゃ美術館と連携を取り、その土地に伝わる文化や自然を、地域の力でおもちゃ遊びを通じて地域に伝えていきます。

地域に愛され、地域の文化を、おもちゃ遊びを通じて伝承していく場「おもちゃ美術館」は小さな子どもから大人まで笑顔咲く場所です。ぜひ行ってみてください。



東京おもちゃ美術館



認定NPO法人
芸術と遊び創造協会

いきた形で暮らしを伝えたい ～実家をまるごと博物館に～

インタビュー

NPO法人 昭和の暮らし博物館 事務局長 小林こずえ

東急池上線久が原駅周辺。のどかさの残る住宅街に小さな博物館がある。70年ほど前の昭和時代に建てられた木造住宅と家財道具を保存して公開する、昭和の暮らし博物館（以下、博物館）だ。開設からかわる事務局長の小林こずえさんにお話をうかがった。

―実家を残して公開する

小路の先、看板をたよりに木戸の門をくぐる。8月の空の下、縁側を覆う緑が涼しげだ。受付を済ませ、さっそく小林さんに案内していただいた。

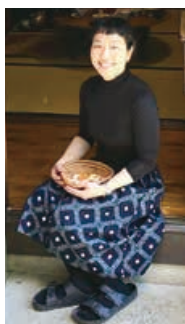
「ここは館長の小泉和子が両親と姉妹4人でくらしただ家です」。小泉和子さん（以下、小泉さん）は日本の生活史を長年、研究してきた方だ。実家であるこの家は、昭和26年（1951）に建築技師だった小泉さんの父によって設計された。資材が不足する時代、通常よりも天井高が低く座敷には床の間もないが、採光や風通し、備え付け家具など生活上の合理性や快適さを求めた工夫が建物の随所にもり込まれた。「18坪とこじんまりしていますが、当時としてはモダンな住宅でした」。その後、増築を経て平成8年までの45

年間、小泉家がくらしただ。いつとき空き家となったものの、家には家財がほぼ残されており、くらしをそのままいきた形で伝える貴重な資料と考えて、保存・公開を模索した。公的な機関に支援を求めたが援助を得られず¹、それならばできるころまでやろうと、小泉さんが自ら発起して家の一部を修復し博物館として開設するに至った（平成11年／1999）。

―昭和時代のくらしを体験

博物館では、昭和20年代後半から30年代前半の郊外都市の生活をみせることを主目的に、展示のほか、講座・体験学習、ワークショップなどが行われている。館内は玄関を入るとまず、洋家具を置いた洋間がある。普段は書斎として来客時には接客場所にも使われた。その隣りの4畳半の茶の間は今でいう居間（リビング）だ。茶ぶ台を囲み家族が食事や団らの時間を過ごした。さらに奥に8畳の座敷、2階には4畳半の和室がある。6人家族がくらすスペースにしては狭いと首をかしげると、「当時はものが少なかったですから。それに、家電がない代わりにどの家でも工夫を凝らして生活していました」

小林こすえ（こはやし・こすえ）
NPO法人昭和のくらし博物館事務局長／学芸員
大学で、生活史研究者の小泉和子の元で生活文化史を
学び、博物館の設立準備に携わる。1999年に開館。
以後24年間、学芸員として、草取り、掃除、ガイドか
ら、調査、企画、運営を務め、年間約5千人を迎える。
2018年より
NPO法人とし
て運営、事務局
長を務める。



(右ページ) 普段の茶の間。
(上)昭和のくらし博物館の外観。
(右上)夏の特別展「小泉家に残る戦争」展。(以上、写真提供=博物館)。(右)夕涼みの会。(撮影=角屋ゆずさん)。

いきた形で伝えるために

それにしても、実家を博物館にするとはたやすい話ではない。背景にどのような思いがあるのだろうか。「館長は研究者として重要文化財の建造物の室内家具などの復元に携わるなかで、せっかく建物を保存することができて、まったく建物が処分されたり、活かされずに埃を被ってしまった例を見てきました」ただ展示するだけでなく、いきた形

と、小林さんがそのいったんを見せられた。台所の床板を外すと、床下にはぬか漬けや梅干しの甕が置かれている。夏でもひんやりとする床下は四季を通じて温度を一定に保てるため、食糧の保存場所に適しているのだそうだ。ほかにも、水で冷やす冷蔵庫、鯉節削り、七輪など今では見られなくなった用具が並ぶ。

「7月はふすまとガラス障子から、夏障子とすだれに替えて夏のしつらえにします」。すだれなら、暑い盛りでも涼感を得られる。かつてのくらしの知恵を体感できる貴重な場だと思った。こうしたしつらえ替えや障子の張替えは学芸員実習生の学生が手伝ったり、体験講座としても行われているそうだ。

自ら運営することの先に

それにしても、実家を博物館にするとはたやすい話ではない。背景にどのような思いがあるのだろうか。「館長は研究者として重要文化財の建造物の室内家具などの復元に携わるなかで、せっかく建物を保存することができて、まったく建物が処分されたり、活かされずに埃を被ってしまった例を見てきました」ただ展示するだけでなく、いきた形

博物館では毎年8月に「小泉家に残る戦争展」を企画する。戦時を生きてきた小泉さんは歴史を伝えることに強いこだわりがある。過去を反省しこれからのくらしを考えると、展示の主旨に賛同するボランティアも多い。「運営は確かに苦労があります。それでも誰をはばかること

もなく、こうした企画ができるのも自分たちで運営するからこそだと思えます」と小林さん。部屋には「家を残し、くらしを伝え、思想を育てる」と博物館の理念が掲げられていた。

取材を終える頃、庭からマンドリンの音が聞こえてきた。実習生が家族を連れて演奏の練習に来たという。翌日久しぶりに開催される、夕涼みの会で披露するためだ。「以前のボランティアやスタッフが人生の折々にたずねてくれるんです」。博物館を介して世代を越えて交流が生まれる、そんな人びとの和める場所になることを小林さんは思い描いている。

*1 建築後50年を経た平成14年(2002)に国の登録有形文化財となる(主屋のみ)。文化財保護法による登録有形文化財(建造物)は現状変更等に対する一定の制限や修理への国庫補助等がある。全国で13774件、東京都では448件が登録(2023年現在)。



上からホームページ、Facebook、X(旧Twitter)。



目黒区美術館(目黒区)

～遊びや憩いの場をつくるボランティア～

目黒区美術館では、地域の人との密接なかかわりや、気軽に美術に親しめる憩いの場を大切にしており、さまざまなボランティアが活動している。その一つがトイコレクションボランティアチーム(以下、TVT)。同館でコレクションしている、創造性をはぐくむ、デザインに優れた国内外の木製玩具(トイ)に親しんでもらおうと、子どもや大人が遊ぶプログラムを1995年から行っている。主な活動は、トイの日(だれでも自由にトイに触れられる日/年1回)、児童館でのアウトリーチ(訪問活動)、ファミリーワークショップ(親子対象)。住所や属性、年齢などはさまざま、発足当時のボランティアも数名いる。毎月の例会は、多くの意見が飛び交う、熱量の高い場になるという。芸術性の高いトイは大人も楽しむことができる。来館者がトイに触れられるよう、魅力的なプログラムを企画し、トイに親しむしかけをしているのがTVTだ。

「トイコレクションがあるのは美術館の強み。ボランティアさんがそれらの魅力を引き出してきて、美術館への間口を広げ、人をつないでくれています」(学芸員・重田正恵さん)

開館時間:10時～18時／休館日:月曜日(祝日・休日の場合はその翌日)・年末年始・展示替期間／
入館料:展覧会ごとに異なる(無料～700円程度)

TVTボランティア・山本美和さんのお話

20数年前に幼少だった我が子と共に目黒区美術館を訪れ、トイの存在を知りました。ここでは実際にトイを手中で転がしながら遊ぶことによって、作品であるトイの造形的な理解がより深まり、大人も子どもも楽しい経験となります。当時ワンオペ育児で余裕がなかった私や子どもたちと、一緒になって遊びおらかな気持ちで受け入れてくれたのがTVTの皆さんでした。トイとこれらの活動と楽しさをもっと普及し、その価値を感じてほしいと思ったのが参加の理由でしょうか。

トイの遊びは、正解がなくどのようにも遊べ、トイそのものが持つ造形的な美しさも手伝い、だれでも素敵な世界をつくることができます。参加した子どもと大人が楽しみ、また遊びたいとおっしゃるのが、大変励みになり継続する力となっています。社会全体が効率化や成果主義優先になっている中で、このような遊びの場を大切にしたいと思っています。また、さまざまな職業や経歴を持つメンバーが自主的に意見交換し、時にはよい意味での脱線や対立も生まれますが、それもとても面白く、仲間たちとの活動はやりがいもあります。



(写真) だれでもトイに触れられる「トイの日」のひとつコマ。写真提供=目黒区美術館



(QRコード) 左から順に、目黒区美術館のInstagram、Facebook、YouTube、X。



* 入口に入って左手にガラス張りのワークショップ室があり、カフェはボランティアが中心となって運営しています。展覧会開催中はボランティアが運営するカフェ/ラウンジ(13:00～16:00)も営業しています。JR・メトロ・都営線・東急線の目黒駅から徒歩10分。桜並木の名所、目黒川沿いにあり、アクセスもロケーションも良い美術館です。(編集部)



高麗博物館(新宿区)

※「コリア」は朝鮮半島を一つにとらえた言葉です。

～市民発、日本とコリア交流の歴史博物館～

在日コリアン女性の新聞投稿記事が契機となり「高麗博物館をつくる会」結成。市民とコリアの交流を学ぶ歴史博物館をつくる運動が始まり、開館に向けて、読書会や学習会などがスタート。会報誌発行、朝鮮史講座、史跡をめぐる韓国旅行、連続講座、パネル展示など様々な活動展開の末、準備から11年後の2001年、新宿区大久保に開館。連続講座「在日の今を語る」は2005年～現在も続いている。

企画展示は、テーマ選びから学習、研究、現地調査など時間をかけてボランティアが担当、パネルなどにまとめて館内で展示される。このほか、図録、チラシの作成、宣伝、宣伝依頼なども多くのボランティアの手によって行われ、様々な独自の企画展を開催している。

開館22年目(今年7月)の講演会では、「アートを感じるように、想像力をつかうことで自分とは異なる立場や環境の人を理解することができるのではないか」と、アートと人権に関する内容も語られた。

開館時間:12時～17時/休館日:月曜日・火曜日・年末年始/入館料:400円(一般)、200円(中・高生)

コロナ禍では、来館者ゼロという日もあり、苦戦しておりましたが、現在の企画展開始以来、たくさんの方にご来館いただき、団体やグループでの見学者も増えております。

「チマチョゴリ試着」や「大久保まち歩き」なども実施しておりますので、是非ご連絡ください。

<https://kouraihakubutsukan.org/>

高麗博物館

2023年高麗博物館企画展

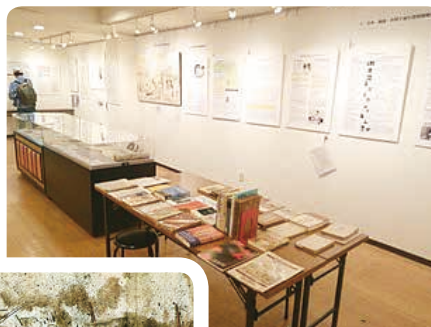
7月5日(水)～12月24日(日)

『関東大震災100年』

土日はギャラリートークなど開催

植民地歴史博物館(ソウル)との連携企画

館内、展示風景。
「関東大震災」を描いた
絵巻を入手したことから、
国内はもちろん、韓国の
メディアから取材依頼も。



「関東大震災絵巻」より
淇谷(きこく)
1926(大正15)年
(新井勝紘 所蔵)

韓服試着(チマチョゴリ、
バジチョゴリ:有料400円)
もあります。



X(旧Twitter)
フォローお願いします～

* 韓国の店舗がひしめく職安通りに面した場所にあります。現在は1階がコンビニですが、かつては韓国商品を扱う店舗でした。7階に上がるまでは「どんなところかな?」と思いますが、館内は明るく、とても見やすいです。前館長さんが入手した絵巻は貴重な歴史資料です。(編集部)

高麗博物館のロゴマークは…

中国の四神の一つとして知られている「玄武」がモチーフ。日本と韓国の古墳の両方で見られるため、日韓をつなぐシンボルとして採用されたと言われています。





水戸芸術館現代美術センター(水戸市)

～開館当初から市民が活躍するアートセンター～

ボランティア^{*1}が担当する現代美術と来場者をつなぐ「ウィークエンド・ギャラリートーク」は1992年開始。解説ではなく、市民の視点で印象や感想などの対話をかさねる。また、高校生無料招待週間での取り組みから多世代へ開かれてきた「部活動」は、2007年、高校生が高校生向けにギャラリーガイドをつくる「書く。部」からスタート。3人集まれば創部の提案ができる^{*2}。一人ひとりの興味関心から他の市民につながり、様々な部活動がおこなわれている。

*1: CACギャラリートーカー(約1年間の研修期間を経て活動する市民ボランティア) *2: 水戸芸術館現代美術センターのなかでのルール。

開場時間:10時～18時(入場は17時半まで)

休館日:月曜日(祝日の場合は翌火曜日)・年末年始

チケット:一般900円、高校生以下/70歳以上、

障害手帳などをお持ちの方と付き添いの方1名は無料

＊滞在制作した作家さんが結成のきっかけになった織り部(2019～)はコロナ禍を経て今夏、再活動。織機体験は大人気で早々に受付終了^^来場者をつくる時間と作品はもちろん、さまざまな想いもシェアしています(編集部)



(上)「書く。部」活動のようす。
(左)「織り部」活動のようす。
(右)ギャラリートークのひとコマ



たいけん美じゅつ場 V I V A (取手市)

～取手駅に直結! アートな居場所～

駅に直結したまちなかの居場所。アートを通じた「たいけん」ができる。取手市、東京藝術大学、JR東日本東京、株式会社アトレが連携、アートによってまちの新しい魅力づくりに取り組んでいる。東京藝大の収蔵庫を一般公開。市民からなるアート・コミュニケータは、鑑賞者との対話を介して作品の価値を育てている。

開館時間:10時半～18時 休館日:木曜日・およびアトレ取手休館日

＊たいけん美じゅつ場VIVAについては本誌15ページでもふれています。あわせてお読みください!



市民とつくる美術館・博物館 〜アートを介して描く私たちの未来〜

独立行政法人国立美術館 国立アトリサーチセンター 稲庭彩和子

美術館・博物館(ミュージアム)の中には、さまざまな人がかかわっている施設も多くあります。そして、そこには展示を鑑賞するだけでなくとまらない、参加型企画なども実はあります。ミュージアムに市民がかかわることで生まれるもの、そしてその先にめざすものについて、アートを介してさまざまなプロジェクトに取り組んできた稲庭彩和子さんにお話をうかがいました。

ミュージアムを 創造的な課題解決の場に

— 稲庭さんが所属している国立アトリサーチセンターは、2023年に設立されたばかりですが、ここではどのようなことをされているのでしょうか。

国内に7つある国立の美術館を法人として取りまとめている独立行政法人国立美術館という組織があります。その中に専門性のあ

る課題に対応する学芸機能を持つ組織が設置されました。それが国立アトリサーチセンターです。7つの国立美術館の機能強化をするとともに、国全体のアート活動の振興に取り組むことを目的としています。

私は、ラーニンググループに所属しています。従来からある学校教育と美術館との連携促進といった取り組みのほか、新しい要素としては「健康とウェルビーイング¹」と「アクセシビリティ²」という分野について重点的に取り組んでいます。

「アートと健康とウェルビーイング」というテーマは、国際的にも21世紀に入ってから注目が高まっている分野です。アートや文化的活動はすべての人々の健康やウェルビーイングに関係があるという認識を広めていきたいと思っています。英国をはじめいくつかの国では健康的なまちづくりの施策としてアートや文化活動を重要なものとして位置付けており、一種のソーシャルデザイン³とも

言えると思います。アクセシビリティについては、誰もが美術館にアクセスできるように「合理的配慮」に対応するなど、「多様性、公平性、アクセシビリティ、インクルージョン」について、具体的にミュージアムでどのように進めたら良いかを検討する研究会などを立ち上げています。

— 10月8日に「健康とウェルビーイング」をテーマにしたフォーラムを開催するそうですね(※取材は9月)。

はい、まずはこの新しい分野についてみんなで学び考える機会が必要だと思いました。たとえばアート活動が人々の生活に取り入れられることで慢性的な疾患や精神的な困難にどのように対応できるか、科学的にも論じられてきています。フォーラムでは、この分野で先進的な活動をしている英国の事例とその背景にあるストーリーを英国から担当者を招へいして聴き、参加者とともに考え、語り合うというものです。予想外に

多くの方から反響があり、驚いています。美術関係者はもちろん、医療や福祉、街づくり関係など多様な方々と、海外からも25の国・地域から申し込みがありました。「ミュージアムで幸せ(ウェルビーイング)になる。」という、ストレートなタイトルが、多くの人に響いたのかもしれない。

アートを介した ソーシャルデザイン

— 稲庭さんは、前職でミュージアムと市民をつなげるような活動をされてきましたよね。

市民とミュージアムの協働に関しては、学生の頃から関心がありました。きっかけの一つは武蔵野美術大学の及部克人さん(現、同大学名誉教授)の市民講座に参加したことです。横浜市の情報を見て「面白そう」と思って。その頃から、ミュージアムにはまだ拓かれていない可能性があるのではと考えるようになり、従来のミュージアムの枠組みではない市民参画の活動を作りたいという想いがありました。

しかし、2000年代の日本の美術館では、市民が美術館の事業にかかわることはなかなか難しかったのです。美術館側には市民参画事業の枠組みもなく関わり「のりしろ」をつくるのが難しい

状況でした。当時、地域の方からこんなプログラムを美術館でやってみたいという提案があり、私もその企画に賛同し、会議に出すと、「その人は誰か?」と聞かれ、「K市の市民で、子育て中のお母さんです」と答えると「そのような提案をしてくる人がいっぱい出てきたらどうするの?」と言われました。市民との協働を実現するには、市民がNPOをつくり、一方でそれと連携する美術館の体制と事業の枠組みが必要だと思いました。

その後、2011年に東京都美術館(以下、都美)に移りました。都美というと、大型の特別展で泰西(たさい)名画を展示するといったイメージを持たれることも多いのですが、1975年のリニューアルオープンの際に「創造と共生の場」「市民にひらかれた場」を目指し、市民が主体的に活動をする場としてのDNAのようなものがあつたのです。日本で初めての美術図書室を設けた美術館でもあり、市民参加型の講座今というワークショップ)を始めたのも公立美術館では都美が初めてではないかと思っています。及部さんの企画した講座は1980年前後に継続して行われていました(↓ORコード①)。ただ、そうした活動が歴史の中で埋没してしまっていたので、市民主体のDNAを掘り起こし、受け継ぎたいと思います。2012年に及



とびらプロジェクト・「とびラー」のみなさん(2022年)。

部さんと一緒に研究会を開きました。80年代に、及部さんの講座に参加した方々が、30年の時を経ているにもかかわらずたくさん来てくださって、すごい熱量でした。

「とびらプロジェクト」がスタートしたのも2012年からですね。

東京都から「アート・コミュニケーション事業」を始めるというお話があったとき、それは当初は鑑賞教育⁴の充実などを主なねらいとした内容だったのですが、私はより双方向的でクリエイティブな学びの場となる市民参画の事業が良いのではないかと思い、とび

らプロジェクト(↓QRコード②)につながる提案をしました。そこから始まって、都美と東京藝術大学(以下、藝大)とが手を組んで、美術館を拠点にアートを介してコミュニティを育むことを目的とした活動に発展していきました。一般から募集したアート・コミュニケーション(通称:とびラー)が、学芸員や専門家とともに、人と作品、人と人、人と場所をつなぐという取り組みです。とびラーは「都美」と「新しい扉を開く」の意味を含んでいます。

アート・コミュニケーションは造語ですし、最初はなかなか理解が得られなかったのですが、「ポランティア」という言葉はあえて使いませんでした。とびラーは、人が出会うつながる場を、自ら企画・運営し、つくっていく人たちであり、美術館を拠点にして社会の課題を視野に入れて活動する、いわゆるソーシャルデザインを描く人たちのなのです。

ミュージアムが 社会とのかかわりを育む

——とびラーたちは、障がいのある人、外国にルーツのある人、子どもや高齢の人々などを美術館につなぐ取り組みを企画し、活動されていますね。

たとえば、障がいのある子どももない子どもと一緒に参加できるワークショップで、3か月にわたる隔週で6回行うプログラムがありました。通常のワークショップでも3か月にわたる継続のプログラムだと、お休みする方が当然出てきますし、ましてや障がいがある場合、体調の管理もより難しいので、6回は負荷が高いかなと思っただけですが、欠席した子どもはほぼゼロでした。これは、美術館の魅力以上にとびラーたちの存在が大きかったと振り返って皆で改めて思いました。まさに、名前の通り、とびラーたちが、美術館への扉を開けたのです。美術の専門性を持っている学芸員たちだけでは、そうしたことはなかなかできません。子どもたちの言葉に耳を傾けるアート・コミュニケーションの聴く力が発揮され、子どもたちはとびラーに毎回会いたくて来てくださったのではないかと。こうした活動を美術館と市民が共同して企画し、実行するのはとてもエネルギーのいることですが、とびラーたちにとっても活動の場が「サードプレイス」⁵となっている」と言います。こうしたプロジェクトを通して、人と人がつながることと起こる化学反応みたいなものが、美術館を介することで、予想をはるかに超えて起こりました。とびらプロジェクトについては、

オープンソースにしている、書籍やウェブサイトで公開している、具体的な活動や「化学反応」についてはそれらを見ていただけたらと思います。

——つながる場としてミュージアムが適しているのはなぜでしょう。

「作品の存在が、人と人をつなげる力を持っているんです。美術館に展示されている作品は、誰かがそれを大切だと感じて、誰かと共有する必要があると考え、わざわざ保存しているものなわけです。ミュージアムに保管されているものは全て、誰かが誰かにつなげたいと思っているものなんです。単なる物体ではなく、すでに人をつなげる力があるものが集められていると言っても過言ではありません。

また、作品の価値は固定されているわけではなく、また学術的に権威ある人だけが決めるものではないのです。もちろん作品の社会的背景や、美術史的な位置付け、作家の経歴などについての研究や分析は重要ではありますが、それと同時に、今ここに生きる私たちにとつてその作品がどういう存在なのかをともに考え、その作品に新たな多様な価値をつくるのが重要だと思っています。自分が生きていく今の時代にある作品の価値

の創造に参加することは、今を生きる自分の存在にも価値をつくることになります。

とびらプロジェクトの基礎講座で一番大切にしてきたのが「きく力」。コミュニケーションという、話が上手な人をお願いできるかも知れませんが、私たちのコミュニケーションを深めるのは実は「きく力」だと思います。そしてアートの鑑賞も「きく力」とすごく共通するところがあります。実際には作品は何も言わないのですが、作品に関心を寄せ、作品に「耳をすませる」ことがとても大切なことです。聴く力が高まると、鑑賞も深まります。人と一緒に鑑賞し、人の話にも耳を傾ければ、複数の人と共同で作品を観ることができ、それは社会とつながる場ともなります。

——注目されているミュージアムはありますか？

好きなミュージアムはたくさんあるのですが、あえて斬新なアートの場である茨城県取手市の駅ビルにある「たいけん美じゅつ場VIVA」⁶をあげたいと思います。つくばエクスプレスができたことにより、取手駅のアトレの利用者が減少したのですが、空き店舗の空間も活用して、取手市と東京藝術大学、JR東日本東京支社、ア

トレの4者が連携して運営しているスペースです。ここにもアート・コミュニケーションがいて、さまざまなアートコミュニケーション事業を行っています。このスペースには透明中が見える収蔵庫もあり、藝大の収蔵作品も観られるようになっていたり、ファブラボ⁶のような機能もあります。工作室以外は無料の場合なので、乗り換えのついでなどで、高校生が多く訪れていて、いろいろな可能性を感じる空間でした。

市民が主体的に参画している美術館は他にもありますが、美術と予算を準備し事業構造をきちんと作らないと、とん挫してしまうことも少なからずあります。市民参画の社会的な価値を見える化し、ソーシャル・インパクト⁷につながることを伝えていかないと継続が難しくなります。活動を言語化して説明することは、努力が必要ですが、何度も伝えていく必要があると思います。

■ **まずは、行ってみよう！**

—— 地域のあるいは社会の中で、つながりをつくる要として、市民がミュージアムと協働する動きは、世界的にもあるのでしょうか？

大きな潮流としてはあると思います。例えば英国のマンチェスターではカルチャー・チャンピオ

ンというアート・コミュニケーションに少し似た制度を持つミュージアム活動があります。しかし市民が主体的に参加し企画していくような、とびらプロジェクトのようなしくみの事例が多くあるわけではないようで、海外からもとびらプロジェクトへの視察はこれまでにも何件もありました。国によっても状況も考え方も違う中、いろいろな見方があります。もちろん、市民参画に関心があつて視察に来るので、参照して自分の国でもやっ

てみたいという方が多いのですが、たとえばフリーランスのミュージアム・エデュケーター⁸が多いドイツなどでは「アート・コミュニケータの存在はエデュケーターの仕事と競合してしまうのでは」とか、過去にアーティストの無償労働が社会問題になったことがある韓国の方からは「無償でのアートに関わる活動を推進するのは法律で禁じられているので難しい」という意見がありました。いかに近視眼的にならずに、また生産性を求めるような活動ではなく、市民とともに欲しい未来を描くのか、なかなか難しいことですが、対話を絶やさない開かれた活動だということをお伝えしています。市民一人ひとりのエネルギーがかけ合わさったときのパワーや魅力は体験しないとなかなか分かりません。

—— 市民が参加する場をつくることに、大切なことはありますか？

事業の組み立てをしつかりつくることでしょうか。お菓子作り

に例えると、ケーキのスポンジは、材料をそれぞれのグラム数を間違えずに揃え、混ぜる順番も気をつけないと膨らまないですよ。スポンジをきちんと膨らませるには正攻法があり、そこには技術が必要。市民参画のコミュニティの運営も同じで、やはり正攻法と

いうのがあります。学びと実践の場の土台となるしくみをつくるのが大切だと思います。具体的には、人と予算と場の確保といった物理的なもののほか、一緒に活動する市民同士が理念を共有する、会話の場をつくる、活動のフィールドをもうけるといったことですね。

—— 最後にメッセージをお願いします。

日本では、美術館は愛好家のためのものというイメージがまだあります。でも、そもそも美術館やそこに収蔵されている作品は市民のもので。まずは、地域にある、もしくは旅行先で見つけたミュージアムに足を運んで、自分とつながりのある場として楽しんでいただけたらと思います。

*1 Well(良い)+being(状態)。WHO(世界保健機関)では、「個人や社会の良い状態」としている。

*2 利用しやすさ、利便性の意。

*3 社会の課題に対して、解決策を創り出すこと。

*4 思考力や判断力、表現力の育成を目的に、対話をしながら美術作品を鑑賞する教育法。

*5 自宅や学校、職場とは違う、居心地の良い居場所のこと。

*6 3Dプリンタ。多様な工作機械を備えた、実験的な市民工房の世界

的ネットワーク。
*7 社会課題解決のために市民、自治体、企業などが連携して、社会に影響力をおよびす力のこと。

*8 教師・教育者。ミュージアムで教育普及的な活動を行う専門家。



①造形講座



②とびらプロジェクト

稲庭彩和子(いなにわ・さわこ)

ロンドン大学(UCL)修士修了後、神奈川県立美術館を経て、2011年より東京都美術館のアート・コミュニケーション事業の立ち上げを担当。社会課題を視野に入れ市民と協働する「とびらプロジェクト」や上野公園の9つの文化施設が連携するラーニング・デザイン・プロジェクト「MuseumStartあいうえの」、医療や福祉分野と連携する「Creative Ageingプロジェクト」などを企画・運営。2022年より、独立行政法人国立美術館国立アトリサーチセンター主任研究員。ラーニングや文化施設のアクセシビリティの事業に携わり、特に「アートと健康・ウェルビーイング」の分野に注力。

著書・共著に『100人で語る美術館の未来』(慶應義塾大学出版会、2011)、『美術館と大学と市民が作るソーシャルデザインプロジェクト』(左記)、『こともと大人ののためのミュージアム思考』(左記)等。

(参考文献)

- 『美術館と大学と市民が作るソーシャルデザインプロジェクト』
- 青幻舎/著者・稲庭彩和子・伊藤達矢/編・とびらプロジェクト
- 四六判/272ページ/1600円+税/ISBN: 978-4-86152-700-5
- 『こともと大人ののためのミュージアム思考』
- 左右社/編著・稲庭彩和子/
- 著・伊藤達矢・河野佑美・鈴木智香子・渡邊祐子
- 四六判/292ページ/1800円+税/ISBN: 978-4-86152-700-5

居場所の活動の今を知るアンケート調査

2023報告

当センターでは2020年4月に、新型コロナウイルス感染症の拡がりを受け、地域の居場所の活動への影響を知るために『新型コロナウイルス対応に関する緊急アンケート調査』を実施しました。それから3年あまりが経過し、あらためて居場所を運営する団体（以下、団体）に対し活動の現状調査を行いました。以下に結果の概要をご紹介します。

調査方法 WEBによるアンケート
 調査期間 2023年6月末日～7月10日
 対象 都内で活動する居場所団体(2020年4月実施の調査回答団体のほか区市町村ボランティア市民活動センターの呼びかけによる)
 有効回答数 91団体
 *本調査では新型コロナウイルス感染症拡大期間を2020年4月から2023年5月までとした

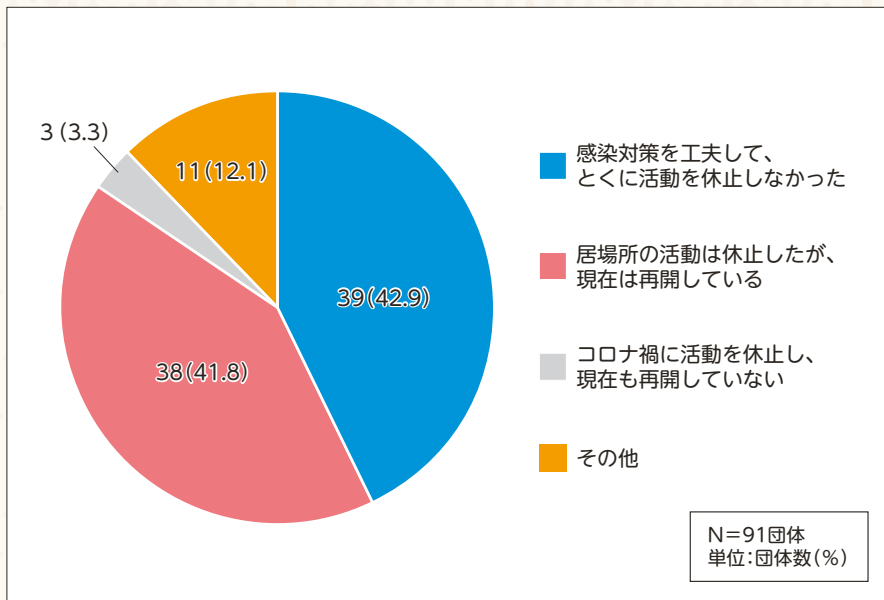


図1 コロナ禍での活動への影響

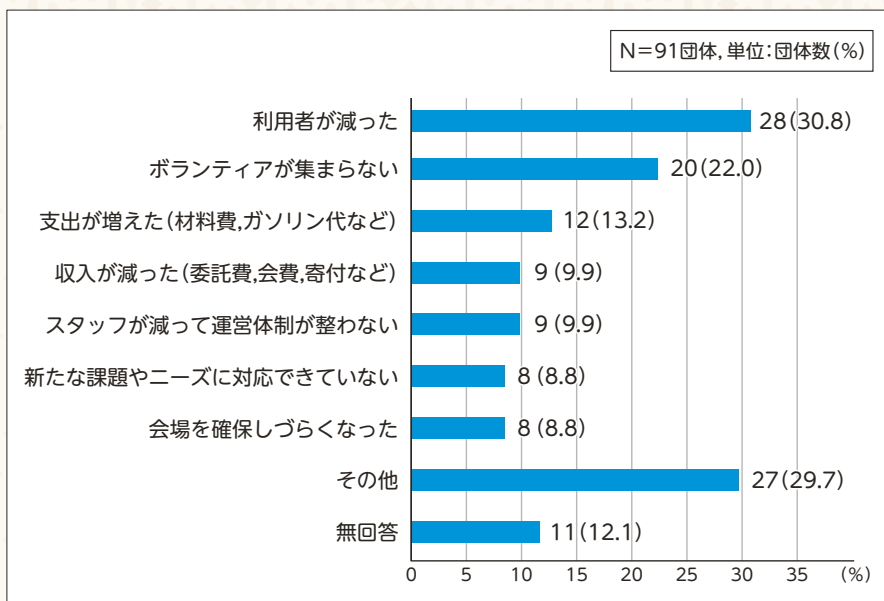


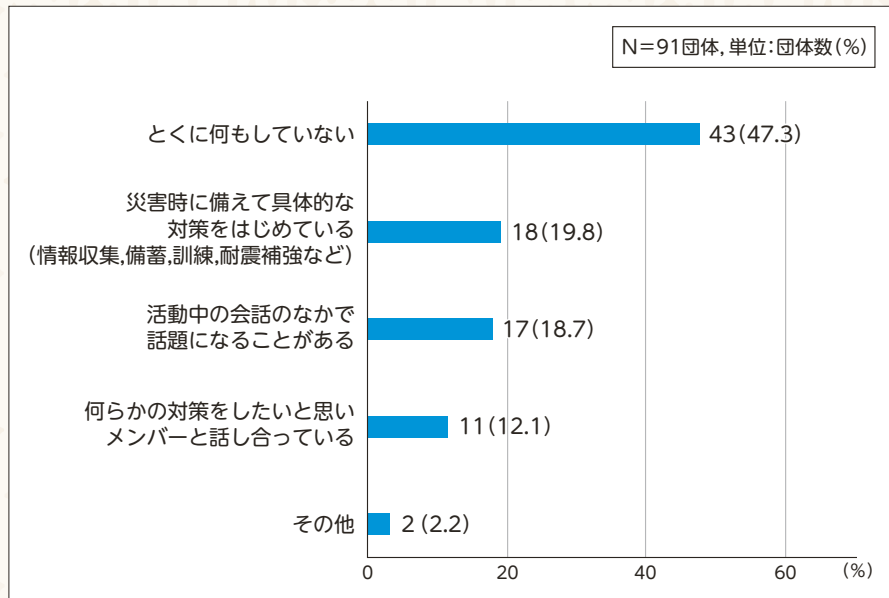
図2 団体の運営面での課題(複数回答)

■コロナ禍において4割強の団体が活動を継続
 「コロナ禍での活動への影響」図1
 2020年4月実施の調査では、ほぼ9割の団体が活動縮小あるいは中止と回答していました。

今回の調査では、42・9%の団体がコロナ禍においても感染対策を工夫して活動を休止しなかったと回答し、41・8%の団体が一時休止したが再開したと回答しました。その一方、現在も活動を再開していない団体(3・3%)があることもわかりました。

■フードパントリー・お弁当配食などを居場所の活動と並行して実施
 調査では、コロナ禍に新たに始めた居場所以外の取り組みについて聞いたところ、フードパントリーやお弁当の配食、オンラインの活用などが新たな取り組みとしてあげられ、5割を超える団体が居場所の活動と並行して現在も実

図3 災害時に備えての取り組み(複数回答)



実施していると回答しました。そのほか、スマホの使い方支援、フレイル(予防)体操²(いずれも高齢者対象の団体)、子育て中の「パパ」への支援(乳幼児・親子対象の団体)を行なったところもありました。

■利用者やボランティアが減少
【団体の運営面での課題】図2
運営面の課題としてもっとも多

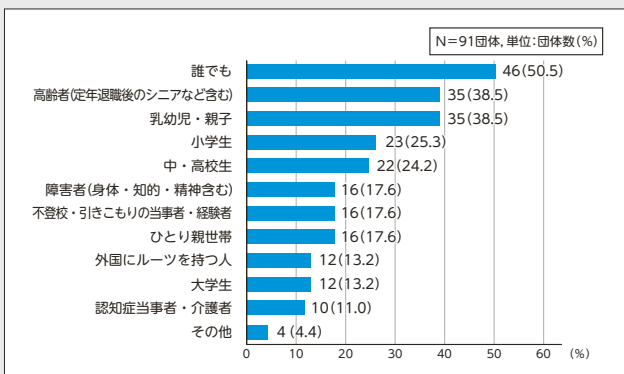
■孤立化の進行、子どもの環境への影響
調査では、団体が把握する居場所の利用者の困りごとや、気がかりに思う地域の課題について聞きました。子育て中の親子への支援や中学生の居場所不足、高齢者のひきこもりなどあらためて多様な課題や困りごとが居場所に寄せられていることがわかりました。なかでも、コロナ禍の影響と思われる意見には、「もともと孤立しやすい産後の環境の問題がよりみえづらくなった」「不登校やひきこもりの傾向が増した」「子どもの学力低下」「外出自粛による歩行機能の低下」「発表の場がなくなった」などがありました。

また、コロナ禍の経験から得た気づきや、今後に向けた課題につ

かったのが利用者の減少30・8%、続いてボランティアが集まらない22・0%の回答でした。その要因としては、高齢者の方が「自ら(参加することを)制限してしまう」「活動を手伝いにくい」などの回答がありました。なお、お金の面では支出が増えた13・2%、収入が減った9・9%でしたが、今後は物価上昇の影響も懸念されます。

図4 主な利用対象者(複数回答)

調査回答団体が運営する居場所の主な利用対象者は、「誰でも」と多様な方を対象とする団体がもっとも多く全体の約半数。続いて「高齢者」「乳幼児・親子」が各38.5%、「小学生」25.3%、「中・高校生」24.2%。



いては、「外あそびが見直された」「活動の継続の大切さ」「常設の居場所の必要性」といった意見があげられたほか、未だコロナ禍の完全な収束がみられないなかで、「以前と同様な会食再開の判断が難しい」「オンラインの活用を考えた」「その一方で、「オンライン参加の場合の)利用料徴収の難しさ」があり「オンライン活用への助成金継続」を望む声がありました。

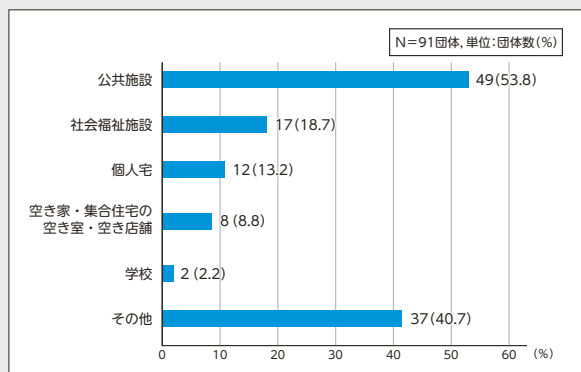


図5 主な会場(複数回答)

活動場所である主な会場は「公共施設」が半数を上回る53.8%、「社会福祉施設」18.7%、「個人宅」13.2% など。

■災害時への備えは「とくに何もしていない」が4割強
【災害時に備えての取り組み】図3
昨今、頻繁に起こる災害をふまえて居場所の災害時への備えについて聞いたところ、とくに何もしていない団体が47・3%、その一方で、対策をメンバーと話し合っている団体が12・1%ありました。当センターでは引き続き、居場所団体を対象に交流や学習の機会を行なっていきます。

*1 生活困窮等の理由で食品や日用品などの入手が困難な方に対して無償で配布する活動。
*2 加齢等による心身の衰えを予防するための体操。

NPOが創り出すエピソード空間Ⅲ：

東日本大震災被災地を支援するNPOとそのスタッフへのインタビュー調査から

東洋大学社会学部 須田木綿子

1. はじめに

東日本大震災の被災地支援に関わったNPOと移動したスタッフたちの「その後」をたどるインタビュー調査の内容を、3回に分けてご紹介しています。対象は、大和証券フェニックスジャパンプログラム（注）からの助成を受けた被災地のNPOのスタッフです。インタビュー調査は、著者と関東学院大学・小山弘美准教授が共同で実施しました。前回のインタビュー調査の概要につづき、今回は、移動したスタッフを対象とするインタビューの内容について報告します。

2. 移動したスタッフの人数と属性

移動したスタッフ29人のうち21人が所属していたNPOは、今も被災地で活動を継続していましたので、それらの事務局を通してインタビュー調査への協力依頼を行い、9人からお話をうかがうことができました。さらに、解散したNPOに所属していたスタッフ1人の所在が判明し、インタビューにご協力いただきました。これら元スタッフの性、年齢、活動期間、出身地を、表1に示します。

このようなインタビューのサンプリング法を、機縁法といいます。ラ

ンダムなサンプリングではないので「〇〇と回答した〇〇人」といった数値ではなく、回答のパターンに着目してインタビューの内容をまとめます。「」内の記載は、インタビュー中に得られた発言です。

3. NPOで働くようになった経緯

元スタッフの多くは被災地出身者でしたが、必ずしも全員が、ずっとそこで暮らしていたわけではありません。進学や就職を契機に他の地域に転出したものの、家族の事情等で実家に戻った後に被災したり、震災をきっかけに被災地に戻ったりと、震災との関わりは様々でした。そして、震災前からNPOスタッフとして街づくりに関わっていたケースもありましたが、多くは、震災前まではNPOやボランティアの活動とは無縁の仕事をしていました。そして仕事先も被災したために、「避難所にいるだけで、何もすることがない」状態になりました。そのようななかで、被災地での支援活動を行っているNPOが人手を必要としている様子に接し、「自分もお世話になったし」、「震災直後のダメージを見て、町のためになる仕事をしたいという気持ち」から、スタッフとしてNPOの活動に加わっていました。被災

の経験を通じて、高齢や障害などの理由で災害時にとりわけ不利な立場に置かれがちな人びとの存在に気づき、それに関連する活動に参加した元スタッフもいました。被災地以外の出身で、もともと各地の災害支援活動への参加経験をもつなかで東日本大震災が起こり、現地にかけて現地に住みこみ、NPOのスタッフとして働いていたケースもありました。

4. NPOから移動した経緯と「その後」

被災地が震災から時間が経つにつれて、NPOに寄せられる寄付金や助成金は減少しました。元スタッフを取り囲む生活事情も変化します。このようななかで、NPOから移動したスタッフの「その後」には、次の4つのパターンがありました。

●パターン1 新しい境地を拓く

NPOでの活動経験をふまえて、新たな境地を拓く「その後」がありました。家業である農業や小売業を再建する傍ら、自宅や店舗の一角をコミュニティスペースとして開放し、子どもや一人暮らしの高齢者のための居場所づくりをしたり、被災地外からのボランティアを受け入れた経験を展開させてツーリズム事業を始めるなどの取り組みです。ひきつづ

表1 元スタッフの性・年齢・活動期間・出身地

| | | |
|------|-------|---|
| 性 | 男性 | 5 |
| | 女性 | 5 |
| 年齢 | 20歳代 | 3 |
| | 30歳代 | 3 |
| | 40歳代 | 3 |
| | 50歳代 | 1 |
| 活動年数 | 2~3年 | 4 |
| | 5~7年 | 4 |
| | 11年 | 2 |
| 出身地 | 被災地 | 8 |
| | 被災地以外 | 2 |

エピソード：

一か所には必ずしもとどまらず、断続的に多様なボランティアや非営利の活動に参加する方法



バックナンバーはこちらからダウンロードできます。

き地域の復興に貢献するために、インフラ整備に関わる事業を起こしたケースもありました。そしてこの間も、以前に所属していたNPOと関係は緊密で、「支店」をつくったようなものだという発言もありました。

ある元スタッフは、次のように述べています。

「市民活動をNPOだけがやっていくことなのかなというふうに思った（中略）営利企業であったり、個人であったり、法人とかはいろいろあると思うが、そういうところはあまりこだわらないで（中略）いろいろな人や物のネットワークも使って社会問題に対応していくことができるんじゃないかっていうふうに思った。」

●パターン2 「二元に戻る」

一度は移動したものの、元のNPOに戻ってきたスタッフもいました。NPOでの活動経験をふまえて福祉関係の仕事に転職したものの、そこでの働き方はNPOほど柔軟ではないことに違和感を覚えることでした。また、移動を前提にインタビューの日時を定めた後、「移動するのを辞めた」スタッフもいました。そしてその理由を、次のように述べました。

「NPOは、既存の制度に縛られず、目に見えた課題に柔軟に対応できる。それが強みであり魅力だと思っている。（中略）あと、自分の感情だけではない、今まで雇ってくださって

た感謝というのもあるので。恩を返すというの、ひとつ、思っている。」

●パターン3 「応援団になる」

家業の再建に専念するために移動した元スタッフたちも、かつて所属していたNPOに心を寄せ続けています。ある元スタッフは、「家業がおちついたら」自分でNPOを立ち上げるなりして、そのときは前にいたNPOにも相談して「連携する計画です。また、「今も、声がかかれば喜んで手伝いに行く応援団」として、あるいは、仕事帰りに以前に所属していたNPOに立ち寄って後任のサポートを行うなど、様々なかたちで活動を支えていました。

●パターン4 「災害支援を人生とする」

被災地外の出身であった元スタッフたちは、被災地の復興とともにその場を離れ、次なる被災地支援の活動に従事していました。しかし、東日本大震災に関わる記録の保存とその展示会を開催するなど、被災地との関わりは続いていました。

5. エピソード：エピソードがもたらす豊かさ

今回ご紹介した元スタッフたちは、一部の例外を除き、数年単位で移動している点においてエピソード豊かな活動家といえます。そしてNPOでの経験をふまえて、自分ら

須田 木綿子（すだ・ゆうこ）



東洋大学社会学部教授。専門分野は、非営利組織論、社会政策学、福祉社会学。著書・論文等：「Changing Relationships between nonprofit and for-profit human service organizations under the long-term care system in Japan [Voluntas,25] (2014年)」、『対人サービスの民営化：行政—営利—非営利の境界線』（東信堂／2011年）、「個人化の時代の包摂ロジック—『つながり』の再生」（宮本太郎編『自助社会を終わらせる』第9章著／岩波書店／2022年）。

注：プログラムのマネジメントは、日本NPOセンターと市民社会創造ファンドが共同で行いました。

しい社会との関わり方を開拓してました。今回のインタビュー調査は、元スタッフが所属していたNPOを通じて調査協力を依頼したため、両者の間に良好な関係が保たれているケースからの情報に偏っている可能性は否めません。しかし、スタッフの移動は必ずしも喪失ではなく、NPOの活動に更なる豊かさや広がりをももたらすものでもあることは、ここに確かに示されていると思われる。



木村万里子 (きむら・まりこ)



日本国際ボランティアセンター (JVC) エルサレム事務所 現地代表。民間企業勤務や大学院留学を経て国際協力の道へ。アジア地域を中心に国内外あわせて 20 の緊急人道支援および教育支援に携わる。これらの支援活動を通じ、より良い支援を行うためには自身も含め、支援する側の資質が重要であることを実感し、支援者の人材育成にも力を入れている。事業の質とアカウンタビリティ向上ネットワーク (JQAN) 認定トレーナー。



せかいをみる

海外におけるボランティア・市民活動や市民と社会とのかかわりを知る・考える連載ページ。

パレスチナにて女性の生計向上や子どもの栄養改善支援、政策提言などに取り組むNGOに所属する木村万里子さんに、現地での日常や社会状況について寄稿いただきました。

寄稿

日常 複雑都市・エルサレムの

木村万里子 (日本国際ボランティアセンター)

● いざ、聖地エルサレムへ
2020年12月、コロナ禍真ただ中のエルサレムへ赴任しました。15年以上NGOに勤務していますが、中東地域の駐在は初めてです。エルサレムの第一印象は「坂が多い街」。事務所からアパートへの急な上り坂や、最寄りのスーパーに至る50段以上の階段はさすがに地図には記載されておらず、「ここで生活していたら足腰鍛えられるかも」と思いました。キリストが最後の時を過ごしたエルサレムで迎えるクリスマス。当時は残念ながら観光客もおらず、教会に飾られたクリスマスツリーが冬の冷たい雨をうけながら厳かに輝いていた姿が印象に残っています。

● 多様な文化・宗教・人種

エルサレムはユダヤ教、キリスト教、イスラム教という三つの宗教の聖地として知られていますが、約1km四方の城壁に囲まれた旧市街は世界遺産でもあり、イスラム教徒地区(岩のドーム・アルアクサモスク)、キリスト教徒地区(聖墳墓教会)、ユダヤ人地区(嘆きの壁)、アルメニア人地区(聖ヤコブ大聖堂)と4つ

の地域に分けられています。カッコ内はそれぞれの宗教にまつわる重要な建物ですが、イースターやラマダンなどの宗教行事には、さらに多くの観光客(巡礼者)が訪れてとても賑やかになります。教会の鐘の音とアザーン(イスラム教のお祈りの時間を知らせる合図)が同時に聞こえることもあり、時々自分がどこにいるのかわからなくなります。また、世界各地から来ている人も多く、中東にいながら世界の文化と触れ合える稀有な場所です。アラビア語のクラスでは、生まれて初めてマダガスカル人と知り合いました。

● 東と西のあいだには…

エルサレムは第一次中東戦争(1948~1949年)の

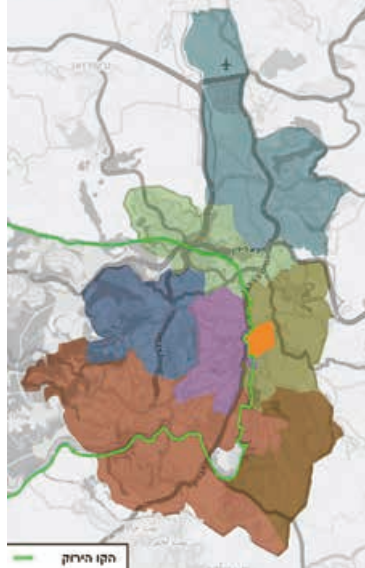
後に設けられた停戦ライン(今は路面電車が走っている国道6号線)を境に、パレスチナ人の住む「東エルサレム」とユダヤ人が住む「西エルサレム」とに分かれています。この二つのエリアは同じような建物が並び、同じ通貨が用いられ、同じ野菜が売られているにも関わらず、全く雰囲気がい異なる国にきたような錯覚さえ覚えます。東エルサレムのカフェで水タバコを楽しむパレスチナ人を見て「中東に来たなあ」といえば、西エルサレムのレストランでお酒を飲みながら談笑に興じるユダヤ人の姿を見ると「ここはヨーロッパか」とさえ思います。エルサレムが戦争によって東西に分断された歴史の経緯を考えると複雑な気持ちになります。道を隔てただけで雰囲気が一変するエルサレムの不思議さを日々感じています。

● 中東は危険なのか?

「エルサレムは危なくないか」とよく聞かれます。度々



【上】エルサレム旧市街のダマスカス門。(門の手前にあるのがイスラエル兵の監視小屋) (2023年3月撮影)
 【下】現地スタッフおよびパートナー団体スタッフと。(写真中央が木村さん) (2022年9月撮影)
 写真提供=日本国際ボランティアセンター (JVC)



エルサレム市街図。緑色の線がかつての停戦ラインで、その西がユダヤ人の居住する西エルサレム、北・東・南はパレスチナ人が住む東エルサレム。オレンジ色のエリアが旧市街。

OpenStreetMapにもとづく地図
 (https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Jerusalem_districts_map.jpg) を加工して使用。CC-BY-SA 2.0

発生するガザ空爆のニュースや、中東の危険というイメージがあるからだと思いますが、世界有数の観光都市でもあり、暮らしやすい街だと感じています。外務省の危険度レベルでもエジプトのカイロやカンボジアのシエムリアップなど馴染みのある観光地と同じ「レベル1(十分注意)」です。パレスチナ人・イスラエル人双方とも日本のマンガやアニメが大好き、柔道や空手を学んでいる親日家も多く、道を

歩いていると「どこから来たの」と気さくに声をかけてくれます。

● 日常のなかの「非日常」

イスラエルでは男女ともに18歳から兵役義務があり、治安維持の名目でエルサレムの至るところに大きな銃を持つた若いイスラエル兵がいます。狭い旧市街の道で兵士とすれ違う時、路面電車で兵士が隣に座った時など、銃が暴発したらどうしようかと内心ドキドキすることも。ただ、長く駐在していると兵士がいる光景が「日常の風景」になってしまい、日本ではありえない状況に慣れることの怖さも感じています。例えば、東京・浅草門の前に銃を抱えた米兵がいることを想像してもらえればその異常さがわかると思っています。外国人が狙われることはありませんが、パレスチナ人は言いがかりをつけられてイスラエル兵に連行されることは日常茶飯事です。イスラエルの法律上、パレスチナ人を12歳から逮捕することが可能であり、連行や尋問を受

けるパレスチナの未成年者は後を絶ちません。旧市街は遊ぶスペースがほとんどないため、道端でサッカーをしているたら運悪くボールが監視カメラにあたってしまい、イスラエル兵に連行され20万円ほどを払って釈放された男の子の話も聞いて驚きました。エルサレムでは約5人に1人のパレスチナ人男性が拘留の経験を持つとも言われ、特に息子をもちパレスチナ人の母親は気が気ではないようです。

● エルサレムは誰のもの？

エルサレムの帰属を巡ってはイスラエル・パレスチナ双方が対立しています。第三次中東戦争(1967年)以降、本来はパレスチナに属するはずの東エルサレムを含む全エルサレムを、イスラエルが実効支配しています。イスラエル占領下のエルサレムに住むパレスチナ人はパレスチナ政府ではなくイスラエル政府に税金を納め、パレスチナの国旗を掲げることも許されず、イスラエルの法律で違法と見なされれば強制的に自腹で自

宅を壊さなければならず、家を収奪されることもあり、移動の自由はありません。国籍がないため居住権しか持たず、何らかの理由で長くエルサレムに住んでいないことがわかると、イスラエル政府から居住権をなく奪われ、エルサレムに住めなくなり、同じ税金を払っているイスラエル人が享受している権利を、パレスチナ人は持つことができません。

日本をはじめ国際社会はイスラエルとパレスチナが二つの国家として共存する道(二国家解決)を唱え、エルサレムは両国家の共通の首都となることを前提に、エルサレムの最終的地位は交渉により決定されるべきとしています。その目処はたっていない。さまざまな宗教や歴史が混在するエルサレムそのものが複雑な性質を帯びた街ではありますが、今なお政治の渦の中で翻弄され続けながらも、エルサレムの人たちもまた複雑な思いを抱えて「非日常」の毎日を過ごしています。



最強のバンドマンよ、憧れのロックスターよ！
いつまでも、いつまでも
こういうことばかり考えていてほしい！

——吉本ばなな

日々、思考の連続。めんどくさいけど愛おしい
渋谷龍太 (SUPER BEAVER)、初のエッセイ集

『吹けば飛ぶよな男だが』
渋谷龍太著 / KADOKAWA
2023年 / 256p / 2,200円 + 税
ISBN : 9784048971058

「かっこいい」について考える

「人として、かっこよく生きて
いたいじゃないか」(人として /
SUPER BEAVER)

私の人生のバイブルであるこの一節を力強く歌い上げるのは、日本を代表するロックバンド「SUPER BEAVER」のボーカル、渋谷龍太である(尊敬と親しみを込めて「渋谷さん」とお呼びしたい)。渋谷さんの何でもできるカリスマ性に魅了されているわけだが、特にその思考が私に与える影響力は大きい。

*

人としてかっこよく。見た目ではなく生き様が。ハンサムよりクールといった感じだろうか。人生において幾度となく訪れてきた「選択」を迫られる場面で、いつからか私は「一番かっこいい選択肢はどれだろう」と考えるようになっていた。友達からご飯の誘いがあったとき、次の休日にやることを考えているとき、志望校を決めるとき、就職先を決めるとき。日々の行動や発言のひとつをとっても「かっこいいかどうか」はいつも私の中で重要な基準である。

かっこよければ、モテる。単純明快で、私がかっこよさを求める理由。邪な動機だと言われたって、社会がそうなのだからこればかり

は仕方がない。ただ、「人としてかっこよく」を意識したそのとき「あ、これ言ったらオレかっこ悪くね？」と自分を客観視できる。「かっこいい」すなわち「相手に良く見られたい」であり、「かっこいい」を考えることは「相手の気持ちを考える」ことにつながる。その結果、相手に寄り添った行動ができるようになるなら、かっこいいも捨てたもんじゃない。

そりゃあ、かっこいいの基準は人それぞれだ。どんなに急いでも信号はきちんと守る律儀な人のかっこいいと思う人もいれば、道路を横切つて車に轢かれそうになりながらも必死に走って汗水たらして駆けつけてくれるアウトローな人のかっこいいと思う人もいるだろう(信号無視はダメ!)。何をすればかっこいいかなんて明確な正解はない。ただ、人を待たせているのに平気な顔でのんびり歩いているのはNot Coolだ。相手の気持ちを考えればそんなの誰だってわかる。

*

何でもできる渋谷さんは文才にも長けている。今年発売したエッセイ集『吹けば飛ぶよな男だが』では、冒頭(イントロ)という行爲自体、他の生き物にはない人様だけ

のものなのだとすると、ともすればあんまり必要ないことなのかもしれない。でも、うっかり人様に生まれてきてしまったのだとしたら、やれるだけやってみるのも一興だろう。」と綴る。

考えるなんて人しかしらない。だから人はおもしろい。人として生を受けたのだから、考えることを楽しみたい。「人としてかっこよく生きる」ためにはどうすればいいか、自分を俯瞰し相手の視点に立って考えてみれば、取るべき行動のヒントは見えてくる。魅力のある人間を目指すのではない。

私はこれからも「かっこいい」について考え続ける。人としてかっこよく、クールな生き様を、汗水たらして模索していくつもりだ。無論、ハンサムだって諦めたわけではない。

(後藤匠)

『吹けば飛ぶよな男だが』 渋谷龍太著

「魔法の箱」
「そういうもんなんです」
「触りたくないもの」
「お嫁においで」
「この気持ちフロム塩化ビニール」
「箸置きとコースター」
「マッチングアプリ」
「拝啓、映画館様」
「ばばー」「誕生日」「三十」
「美味しそうに食べる人」
「私はあなたを「あなた」と呼ぶ」
「昨日見た夢の話なんだけどさ」
「体裁とポイント」

ほか11編、さらに新作小説を収録

ネットワーク

本誌のバックナンバーは
右記からご覧ください。



～本誌385号より～

読者の声



読者の皆さんからいただいたアンケートの一部をご紹介します。

◆表紙、表紙のことば

表紙に白い百合があり、花言葉を調べてみると純潔という意味があり、また、紫色の意味は永遠とあった。決して忘れてはいけない出来事、永遠と語り継いでいくという意志が伝わってきた。

◆【特集】関東大震災から100年。

私たちは何を学び、どう活かすのか？

様々な立場の方への取材を掲載されていてとても興味深いです。記事を読んで、防災ボランティアについて興味を持った方のためにコラムが用意されているのも良い点であると思いました。

内容とタイトルがあっていないため、最初は記事内容が頭に入ってきてませんでした。3回ほど、読み返してみると被災時に当ても多くのボランティアが活動をしていた話であり、それはそれで大変興味深く『ネットワーク』ならではの視点とと思います。

◆思い立ったがボラ日

～夏の体験ボランティア～

夏ボラの紹介は、大変わかりやすく、はじめて参加する方にも期待をもってもらえるページと思います。

◆TVAC News

児童養護施設から退所後のケアは、

以前より課題として取り沙汰されていました。こうした自立支援のプロジェクトが充実してゆくことを願います。

◆特別寄稿 NPOが創り出す E.ピソディック空間！

NPOに参加する方は、志があって始められているので、環境が変わったとしても、断続的だとしても続けたいかと思うところ、違うところで再開すること、他での経験が生かされてよい効果もあるのではないかと想像します。インタビューを読むのが楽しみです。

◆いいものみいっつけた！

小茂根福祉園

こういった活動がどんどん浸透して、身近になってほしいと感じました。

◆つばやきブレイク

こちらの記事は他の記事とは一風異なる内容で面白があると感じました。映画や本から思考を巡らせる楽しさを感じます。

お気軽に「意見・感想」をお寄せください。



本誌で使用しているQRコードは、(株)デンソーウェブの登録商標です。

東京ボランティア・市民活動センター

(TVAC: Tokyo Voluntary Action Center)

<https://www.tvac.or.jp>

東京ボランティア・市民活動センターは、ボランティア活動をはじめとするさまざまな市民の活動を推進・支援しています。どうぞご利用ください。

利用

会議室 会議室A・B(各40人)・C(15人) 無料
※会議室AB通し(80人)
貸出機材 印刷機(2台)紙持ち込み、点字プリンター 他
申込み 4ヶ月前から電話で受付(03-3235-1171)

情報提供

最新のボランティア・市民活動情報は、センターのホームページをご覧ください。http://www.tvac.or.jp/

開所時間

*ホームページでご確認ください。

火曜日～土曜日：9時～21時 / 日曜日：9時～17時
(月・祝祭日・年末年始除く)

交通アクセス

JR、地下鉄(東西線・有楽町線・南北線・大江戸線 出口B2b) 飯田橋駅下車

ネットワーク

発行人 山崎美貴子

編集委員 上杉貴雅(メイクスマイル/オレンジフラック)

江尻京子(東京・多摩リサイクル市民連邦)

片岡紀子(患者スピーカーバンク)

亀川悠太郎(葛飾区社会福祉協議会)

小池良実(岡さんのいえTOMO)

長畑 洋(TDU-豊野大学)

中原美香(NPOLISク・マネジメント・オフィス)

野村美奈(武蔵野会 リアン文京)

室田信一(東京都立大学)

TVACの公式ソーシャルメディア



編集・発行：東京ボランティア・市民活動センター
〒162-0823 東京都新宿区神楽河岸1-1
セントラルプラザ10階
TEL：03-3235-1171 FAX：03-3235-0050
E-mail：nw@tvac.or.jp

印刷：島津印刷(株)

デザイン：東京ボランティア・市民活動センター/島津印刷(株)

表紙イラスト：フローラル信子

2023年10月20日発行(通巻No.386)

ISBN 978- 4-909393-51-7 C2036

定価400円(本体364円+税10%)

本誌掲載記事の無断複製・転載を禁じます。



1 0 0 1 1 1 0 3 4

作り手インタビュー



工程のひとつひとつに、様々な人が手をかけてできあがる、『いいもの』。制作にまつわるお話をうかがいました。

いもの子せんべい

第2川越いもの子作業所

—おせんべいづくりを仕事にする作業所は少ないと聞きます。その経緯を教えてください。

この開設時(1997年)、障害の程度の重い方も担える仕事を検討するなかで、賞味期限が長いという利点から、おせんべいを作るようになったそうです。大型の機械を導入し、当時としては思い切った選択でした。その後、品質や作業工程の改良を重ねて今に至ります。

—作業では、どのようなことを心がけていますか。

一人ひとりの体力や得意なことに適した作業を考えて担当してもらうことを大切にしています。おせんべいづくりは焼き・味付け・乾燥・絵や文字をおせんべいに印刷する製造担当、計量・袋詰め・ラベル貼りなどの包装担当、そして出荷から納品、販売まで、総勢35人で取り組んでいます。

作業中の製造室は夏は暑く、冬は外との気温差が大きくなるなど、からだに負担がかかるので、障害のある仲間たちの体調にはとくに気を配ります。これからは仲間の年齢とも折り合いをつけながら、やっていく必要を感じています。



おせんべいを焼いた後の味付け作業。この日はカレー味。ドラムを回し、カレー粉をまんべんなく行き渡らせます。



—販売はどのようになさっていますか。

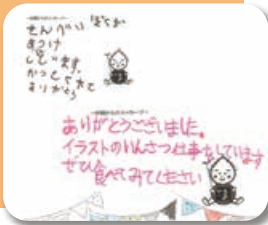
以前は、店舗前を借りてブースを出したり、企業の昼休みに出向いたり、ほぼ毎日、仲間と販売に出かけていました。毎月、開催していた『わくわくいもの子市』も好評で、購入してくれる方と仲間が直接に接する大切さを実感したものでした。しかし、コロナ禍では販売に出ることはいっさい中止、今も中止のままです。この間、売上げが落ちた以上に辛かったのは仲間たちの仕事が無くなったことでした。おせんべいづくりは仲間にとって社会で生きていくことそのものですから。現在は学校や幼稚園、企業など、購入してくださった方の評判を聞き、そこから受注が増え、とてもありがたいと思っています。

コロナ禍で仲間たちは対面販売ができませんが、各種イベントに出店し販売もしています。写真は横浜市都筑区のショッピングモールにて。



えびせんべい
194円/袋。サラダ味、
黒こしょうなど味は多
種類。揚げ煎餅のほか
「お客様のオーダーに
より各種箱詰め等にも
対応しています」。

注文と同封される「仲間から
のメッセージ」。



いいもの みい~つけた!

このコーナーでは、ボランティア・
市民活動・福祉施設のグッズや作品
を紹介します。

Vol.
45

仲間の想いをのせて焼く いもの子せんべい

どんなに障害が重くても働きたい、地域の中で暮らしたい。そんな願いを大切に、「障害の重度、軽度または種別を問わず、地域の中で、労働・生活・文化・経済その他あらゆる場面で機会を得て、障害者も一人の人間として自立していけるよう支援していく」という理念のもと作業所の運営を行っています。

一人ひとりの仲間に合わせて仕事をつくるために、多種多様な仕事に取り組み、おせんべい製造もその一つ。仲間たちの想いをのせて一つひとつを手づくりしています。「モノづくり」は、お客様にとっての大切な「コト」に仲間たちが応えようとする労働です。コロナ禍の影響で不安定な時期もありましたが、逆にそれをきっかけにお客様が全国に広がってきたことを実感しています。この記事を読んだ皆様にも是非仲間がつくる「いもの子せんべい」を食べていただきたいですね。



市内の保育園が川越
百万灯まつりで販売
する商品を準備させ
ていただきました。

文字やイラストが印刷
された「プリント
おせんべい」は10枚
から注文を受ける。
大丸せんべいに印刷
の場合、378円/枚、
加えて製版代がかか
る。

印刷はシルクスクリーン
静電印刷という方式で
行っています。凹凸のあ
るおせんべいの表面上で
も細かな線がクリアに出
せます。



社会福祉法人 皆の郷 第2川越いもの子作業所

所在地 〒350-1105 埼玉県川越市今成3-13-3

TEL 049-224-5045

FAX 049-224-5037

E-mail d2-jusan@d2imonoko.jp

HP <http://www.d2imonoko.jp/>



〈HP〉



学校を卒業する子どものためにお母さんが注文して、お世話になった皆さんにお配りしたそうです。自分のおせんべいができてとっても嬉しそうでした！



生きるたのしみ、働くよろこび

カナエルチカラ

中央ろうきん助成制度



現在応募受付中

中央ろうきん助成制度“カナエルチカラ”2024

～生きるたのしみ、働くよろこび～

中央労働金庫は、誰もが「生きるたのしみ」と「働くよろこび」を享受できる地域社会の創造に向けて、生活者・労働者の視点に立ち、地域の課題解決をめざした新たな自主事業の開発に取り組む市民団体(NPO 法人等)を応援しています。本助成制度のテーマに貢献する事業・活動に取り組んでいる皆様から積極的なご応募をお待ちしております。

応募受付
期間

2023年10月1日(日)
～10月31日(火)【応募メール必着】

助成対象
期間

2024年4月1日(月)
～2025年3月31日(月)

助成年数・
金額(上限)

毎年のお募り・選考を経て、
最長3年間継続助成します。
1年目：50万円 / 2年目：50万円 / 3年目：100万円

助成金額：総額1,500万円(上限)

応募方法

※中央労働金庫ホームページにて、必ず詳細をご確認ください。

- 「応募要項・応募用紙・記入の手引き」の入手方法
右記 URL または二次元コードからアクセスし、ダウンロードしてください。
- 応募用紙の記入にあたって
『記入の手引き』を参考に、パソコン(Word形式)で作成してください。
- 提出書類(メールにて提出)
 - 応募用紙(Word形式)
 - 定款(PDF形式等)
 - 最新の事業報告書および決算書類一式(活動計算書、損益計算書、貸借対照表、財産目録など)

1.対象事業・活動

- 新たな事業の立ち上げを応援します。既存の事業・活動に新たな視点や切り口・要素や方法を加えたものも含めます。
- 「生きるたのしみ」という面では、広く「ひと・まち・暮らし」づくりに役立つ発想豊かな事業・活動を想定しています。
- 「働くよろこび」という面では、働く人が直面する、「疾病治療・介護・子育て等と仕事の両立」「働くことに困難を抱える若者や女性・高齢者の自立就労支援」など、多様な働く場・機会の創出に焦点を当てた事業・活動を想定しています。

2.助成対象となる団体

- 上記1.対象事業・活動に取り組む市民団体で、要件をすべて満たす団体とします。
- 民間の非営利団体で法人格を有すること(NPO法人、一般社団法人など)。
 - 応募時点で団体設立後1事業年度経過していること。
 - 主たる事務所の所在地および主な活動の場が、関東エリア1都7県内(茨城、栃木、群馬、埼玉、千葉、東京、神奈川、山梨)の団体であること など

助成制度の詳細・
応募用紙はこちら



<https://chuo.rokin.com/aboutus/csr/subsidy/application/>



応募書類提出先・お問い合わせ先

中央労働金庫 総合企画部(CSR)担当:山崎
TEL:03-3293-2048 (平日9時～17時)
E-mail:npo@chuo-rokin.or.jp

中央ろうきん

[2023年9月1日現在]